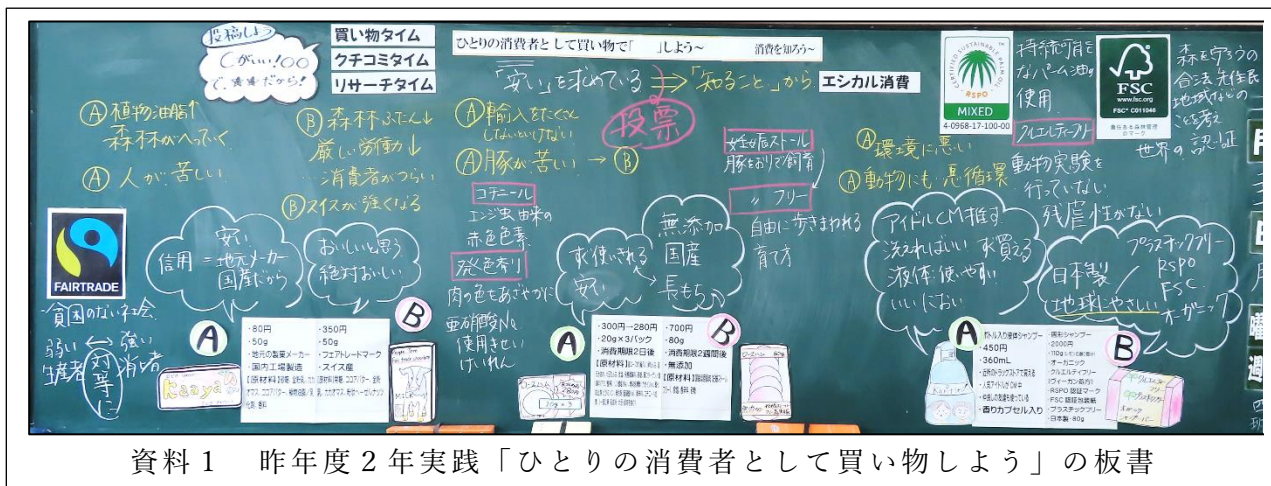


1 主題設定の理由

本校の生徒は、明るく素直で、家庭分野の学習に前向きに取り組む生徒が多い。献立作りの単元では、栄養教諭が作成した資料を基に栄養バランスのとれた給食献立作りを行った。互いに付箋紙を使ってアドバイスを伝え合い、更によりよい献立にしようと見直すことができた。

一方で、「栄養バランス」など課題設定された事象に対しての追究意欲は高いが、「見ばえ」「味付けのバリエーション」など多面的・多角的に考えを生かそうとする生徒は少ない。そこで、多面的に問題を追究する姿や、学習領域を越えて経験や既習事項を生かし考えを



資料1 昨年度2年実践「ひとりの消費者として買い物しよう」の板書

深めていく生徒を育てたいと考えた。

また、昨年度2年生の実践で多くの自分たち中学生も消費者は「安さ」を求めて購入しているが、商品には社会に繋がるよい面や悪い面があることを学習した。しかし、昨年度は、社会に及ぼす影響を考えて取組を行っている企業・商品を調べるところで学習を終えてしまった。そのため、本研究では、まだまだ自分で自由になるお金は少なく消費決定の機会が少ない中学生に、少しでも自分事として責任ある消費行動が社会と繋がっていることを実感し、生活の中で判断していくことができるようにしたいと考えた。

2 研究の構想

(1) 生徒Aの実態

生徒Aは授業の振り返りに、その時間に学習した用語を用いて記述することができる。しかし、自分の生活を省みて考えたことや今後の自分の家庭生活につなげる記述はわずかだった。そのため、生徒Aが仲間とともに社会との関わりを考える経験を通し、一人の消費者として判断していく力を高めたいと考えた。

(2) 目指す生徒像と研究の仮説

目指す生徒像を次のように定めた。

仲間とともに社会との関わりを考える経験を通し、今後の消費生活において商品と社会づくりの関係を考え、判断できる生徒の育成

そこで、本研究では、目指す生徒像に迫るために以下のような仮説を立て、実践を通して検証することにした。

(3) 仮説と手だて

《仮説1》

追究活動において、生徒それぞれの生活の中から関心を引き出し調べたり、発信したりする場を設けることで、身近な商品・企業の取組と社会づくりの関係性について理解を深められるだろう。

《仮説 1 に対する手だて》

手だて①ーア「自分の身近な企業・商品について考え、生活を振りかえる場の設定」

自分の生活場面を思い出したり、身近にあるものに改めて関心を向けたりすることで、自分の周囲にある多くの商品に関心をもち、目的意識をもって取組を調べることができるようにする。そして、その学びを生活に繋げて考えられるようにする。

手だて①ーイ「実際の商品やパッケージを用いて体験的な消費活動をイメージする場」

実際の商品パッケージを見ながら、分からないことを調べる場を設ける。そうすることで、実際に自分が消費選択する場面でも、パッケージにある商品の情報を獲得しようとする意識とそこから得た情報で判断していく力が高められるようにする。

《仮説 2 》

追究活動において、仲間や企業と関わりをもつことで、実際の消費選択場面において具体的に商品の情報や社会の状況に関心をもち、消費者として判断する力が高まるだろう。

《仮説 2 に対する手だて》

手だて②ーア「消費者として一人一人が考えをもち、伝え合う場の設定」

消費者目線で一人一人が選択する場面を設け、商品や企業の情報を得ようとする姿勢に繋げる。また、生徒それぞれが商品・企業を選び、調べたことを発表したり、仲間の発表を聞いたのちに生徒一人一人が手紙を送付する企業を選んだりする。そうすることで、ひとりの消費者として自覚をもち現実にも目を向けながら考えを深められる

手だて②ーイ「ICTを用いた意見交流の工夫」

Teams やコラボノートなどのアプリを活用し、意見交流する場を設ける。そうすることで、短時間で多くの生徒の意見を交流し、生徒が全体の意見を可視化でき、意見の交流がしやすくなるようにする。

3 指導計画

時	学習内容	教師の支援と手だて
1	○生活は、生産、販売、購入、消費、廃棄・再利用のサイクルで成り立っていることを知る。 先生の生活から「消費行動」を見つけよう。 ○先生の生活場面で自分だったらどのように選択をするか考え、自分の生活へ視点を広げる。	・教員の生活を具体的に挙げ、自分だったらどのように行動するか考えることで、生徒が自分の消費行動に関心を高められるようにする。 【手だて②ーア】 ・直感的に消費者としての意思を表し、現状の意識を確認できるように、短時間でコメントができるチャット機能を活用する。 【手だて②ーイ】
2	○消費者として、商品と社会のつながりを見直す視点をもつ。 ひとりの消費者として買い物しよう。 ○それぞれの商品の購入から社会へ及ぼす影響があることに気付く、消費の自立に向けて学習を進めようとする意識を高める。	・実物を提示し、生徒が商品を実際に手に取って考えたり、情報を見つけたりすることで、安いことに目が行きがちな消費行動と社会に及ぼす影響の関係について比較して考えられるようにする。 【手だて①ーイ】 ・タブレット端末で調べる時には、社会へ及ぼす影響に注目できるように、ニュース記事を提示することで調べる視点をもたせる。

	○いろいろな企業が、社会に及ぼす影響を意識して商品作りに取り組んでいることを知り、身近な企業の取組へ興味を高める。	【手だて②－ア】 ・視点ごとでまとめたり、つながりや対立を明確にしたりして、構造的に板書を整理する。
3	購入で応援したい商品・企業について調べよう。 ○選んだ商品・企業がどのような取組をし、その取組によってどんな変化が期待できるのかを示すカードを作成する。	・生徒が主体的に追究できるようにするため、タブレット端末を活用して、一人一人の問題意識に応じて自由に調べる時間を設ける。【手だて①－ア】
4	応援したい商品・企業を広めよう。 ○紹介を聞き、応援したいと思ったカードに丸シールを用いて投票する。 ○応援したい商品・企業に応援の声を手紙で送る。	・追究の視点を広げたり、深めたりするために、自分の考えを学級の友だちに発信したり、聞いたりする場を設定する。【手だて②－ア】 ・追究したことを発信するために、応援したいと思いをもちた企業に自分たちの考えを発信する場を設定する。【手だて②－ア】
5	未来のためにしている取組を聞こう。 ○エシカル消費の視点を深めるために、第6時に手紙を送付した企業と関わり、サステイナブルを目指す取組について講話を聞き、考えたことを尋ねる。	・企業の考えに触れ、消費行動と商品づくり、そして社会へ及ぼす影響に相互関係があることの理解を深めるために、前時に手紙やメールを送った企業とテレビ電話などで通信する。【手だて①－イ】
6	未来のためにできるちょっといいことを考えよう。 ○エシカル消費の視点を日常の消費行動に繋げるために、どのような行動ができるか省みる。 ○エシカル宣言をタブレット端末やカードを用いて伝える。	・企業の考えや仲間と意見交流したことをもとに、自らの消費行動を宣言する。【手だて①－ア】 ・考えを共有するために、コラボノートでマイエシカル宣言を共有できるようにする。【手だて②－イ】
第4単元の第3時と第4時の間に設定	<衣生活の単元の中で> ファストファッションから社会を見直そう。 ○大量生産、大量消費の安価な衣類産業が及ぼす影響とその対策について知る。	・食生活分野の他にも視点を広げられるようにハーフパンツ製作の経験と重ねて衣生活の現状を取り上げる場を設定する。【手だて①－ア】
	<住生活の単元の中で> 住生活におけるエシカル消費は何だろう。 ○住生活におけるエシカル消費が関わる場面を考える。	・住生活におけるエシカル消費を追究させるために、追究課題をもち、技術分野と連携した授業を設定する。【手だて①－ア】

4 実践と考察

(1) 意外と近くにある「消費」に気付く場【手だて②ーア・②ーイ】

教員の1日の行動を示し、消費について支払い方法などの観点を与え、分類した。商品・サービス、支払方法、販売方法など生徒は生活の中に多様な消費行動があることを知り、生徒たちは身近にある消費行動に目を向け始めた。自分で選ぶものに何があるか問うと、文房具、おやつ、飲み物、服が挙げられた。そこで、2つの食品のイラストと価格とわずかな商品の情報を示し、Teamsのチャット欄に投稿する「クチコミタイム」を行った。

生徒たちは、判断したことを2分ほどで資料2のようにチャット欄に「どちらを選ぶのか」と「その理由」を記入した。どんな言葉が多かったか問かけると、「安いが多かった」と答えた。産地や期限などの視点もあったことを確認し判断していくために多角的な視点があることを知った。そして、やはり消費者は「安さ」を求めていることを生徒たちは、実感できた。また、「安さ」を選ぶ中でも、限りある予算の中で選ぶために「安さ」と考えている場合と、家庭での消費選択で「安さ」を重要視している場合があることが分かった。

(2) 「消費」と「社会」のつながりに気付く場【手だて①ーイ・②ーア】

第1時に消費者としての理解を高めたいと思い、をもちつつ、「安さ」を重要視している生徒たちに、買い物に行った「通りすがりの消費者」として、一人2種類のハムのパッケージ見本を示した。そして、資料3のハムAもしくはハムBのどちらを

8:57
A 安いすぐ食べるならいいから

8:57
A 安いし早めに食べるなら消費期限がちょうどいい

8:57
AA! 小分けになってて料理するときに使いやすいし安いから!

8:57
B 国産だから

57
A すぐ食べるから消費期限関係ない

8:57
B 消費期限が長いから

8:57
Aが安い! Bは内容量そんなに変わらないのに高すぎるから

資料2 Teamsチャット画面一部



ハム A



ハム B

豚ロース肉（輸入又は国産（5%未満）、糖類（水あめ、砂糖）、卵たん白、植物性たん白、食塩、乳たん白、ポークエキス調味料／調味料（有機酸等）、リン酸塩（Na）、増粘多糖類、カゼインNa、酸化防止剤（ビタミンC）、発色剤（亜硝酸Na）、コチニール色素、香辛料抽出物、（一部に卵・乳成分・大豆・豚肉を含む）

植物油（国内製造）、卵たん白、大豆たん白食品、食塩、砂糖、酵母エキス、酵母エキス調味料／調味料（有機酸等）、加工デンプン、カゼインNa、酸化防止剤（ビタミンC）、pH調整剤、クチナシ色素、増粘多糖類、香辛料、香料、（一部に卵・乳成分・小麦・大豆を含む）

資料3 提示したハムAとハムB



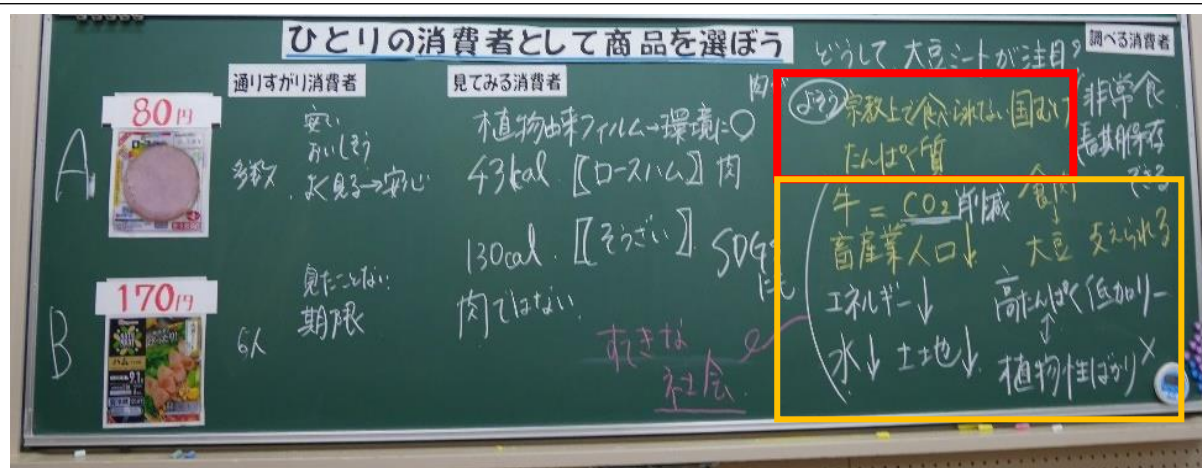
資料4 自分の選んだハムを挙げる生徒



資料5 ハムBを試食する生徒

選ぶかを決めさせ、挙手で意思表示をさせた（資料4）。クラスの多数はハムAを選んだ。理由は、いつもの商品だから、2つを比べると安いからと理由が挙がった。次に「見てみる消費者」として意識の段階を上げ、考えるように投げ掛けた。「期限」「主原料」「添加物」など多様な視点で意見交流をすることができた。

「大豆でできているハムの味が分からない」という発言から、大豆を主原料とするハムBの試食の場を設けた（資料5）。食べた感想は、「脂っこさが少ないから物足りない感じ」「もし、サンドイッチに入っていたら大豆でできているハムだと気付かないから料理に使



資料6 第2時の板書（ハム選び）

えば気にならない」「わざわざ大豆でハムを作っている理由は健康のためなのかな」と試食の経験から「料理に使うなら」と使い方を考えたり、「どうして大豆を主原料とするのか」疑問をもったり、主体的に消費者の視点を深めることができた。

改めて、「どうして豚肉ではなく大豆でできているのか」を問いかけると、「宗教上食べられない人に向けての商品を作ったのではないか、たんぱく質を多くとれるような商品として売ることが狙いでは」と自分が知っている知識を関連させて述べ



資料7 QRコードを読み取る生徒

る様子があった。その後、タブレット端末を用いて調べる時間を設けた。生徒は、「豚肉を生産する畜産業で水を多く必要とする」ことや「家畜が排出する二酸化炭素によって地球温暖化のつなが

りがある」こと、「今後の食糧危機問題で食肉代わりに大豆でたんぱく質補給を支えていく必要がある」など、商品から社会に及ぼす影響を考える発言が続いた。(資料6) 一つの商品でも社会への影響を及ぼす課題に繋がっていると確認した。次に、2つのチョコレートを提示した。第一印象では、普段から食べているお気に入りそれぞれを買いたいと意思表示をしたが、その時点ですでにパッケージに目を向けている生徒も多かった。そこで、ハムと同じように調べようと投げ掛けると、「包装紙が違うよね」「このスマイルプロジェクトって何だろう」と商品の情報に着目していた。

資料8 生徒Aの

全体でQRコードを読み取ろうとする生徒を取り上げ、スマイルカカオプロジェクトのサイトを見てみると、チョコレートの原料であるカカオは「児童労働によって作られている」という現代的課題があった。(資料6)

チョコレートの原料であるカカオは、発展途上国の児童労働により生産されていることを知った生徒から、「早くから収入が得られるならよいのでは」というつぶやきもあったが、全体で「子どもが働くことについて」発言を繋げ、考えを確認すると「子どもが働く」ことは将来お金が稼げなかったり、自分の好きな職業に就けなかったり、子どもたちの未来に関わると考えをまとめた。また、フェアトレードチョコレートを聞いたことがある生徒から、消費者が「安さ」を求めていることで公正な取引ができない現状があると発言があり、「安さ」を求める消費者選択により、影響を及ぼしている社会の現状がほかにもありそうだと考えた。

終末にハムやチョコレート以外にも消費するものは多くあることを投げかけると、生徒Aは周囲を見渡ししながら筆箱の中身の製品を確認するしぐさを見せた。

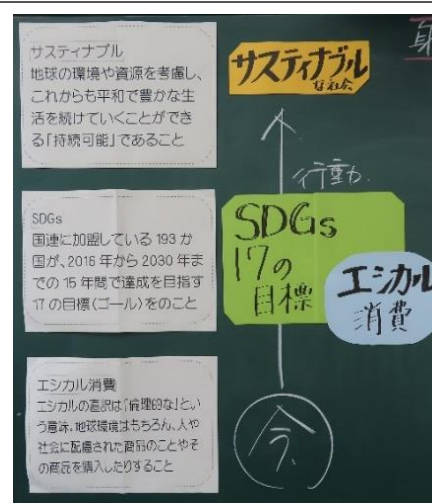
生徒Aの振り返りには、「よく家族が買い物に行くショッピングセンター」「好きなスポーツメーカー」と記述があり、自分の生活を具体的に思い返している様子が見られた。(資料8)

生徒Aの振り返りには、「よく家族が買い物に行くショッピングセンター」「好きなスポーツメーカー」と記述があり、自分の生活を具体的に思い返している様子が見られた。(資料8)

(3) 身近な「消費」を追究する場 【手だて①ーア】

生徒たちの振り返りの中に、日常生活や教科の授業の中で耳にするようになった「サステナブル」「SDGs」「エシカル消費」という言葉について、分かりづらいという意見があったため、図で3つの関係を示した。(資料9)

第3時では、身近な企業・商品を挙げ、生活の中に多くある商品・企業に目を向けることから行った。学区にあるスーパーマーケット、家の人がよく利用している店舗、よく行く飲食店を挙げる生徒や筆箱の中身の筆記用具を改めて見直す生徒など、主体的に身の回りのものに目を向けていた。その中で、取組を調べていく場を設定すると、生徒Aは、自分の着ている制服類のタグを確認して、「これが毎日着ているものだから調べたい」と自分の生活の中から課題を見つけ、調



資料9 用語解説の図

べることを設定することができた。

そして、体操服のタグにあった「KANKO」を検索し、ホームページからサステナブルを目指す取組を調べ、「再生繊維を使用している」「環境のことを考える教室を開いている」ことなどに注目し、応援したい企業・商品カードをまとめることができた。(資料10)

(4)「消費」と「社会」のつながりを深める場 【手だて②ーア】

第4時では、応援したい商品・企業について意見交流する時間を設けた。また、カードに互いに感想を付箋紙で書き、伝え合うように指示した。

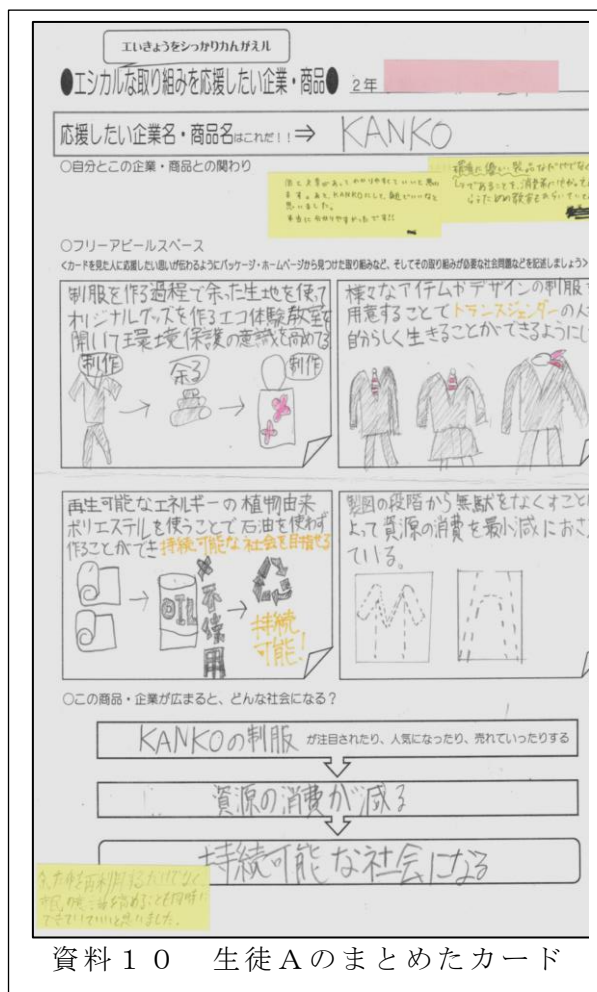
生徒Aは、カードの交流後、KANKOについてまとめたカードに仲間から「消費者に分かってもらうための教室・・・」と記述されたコメントを読み、毎日着ている制服だから自分たちももっと知りたいと言葉を交わしていた。(資料11・12)

交流後、全体に互いの追究を見てみて考えたことを問いかけた。ある生徒は、「揚げ油をリユースしていると言っていたけれど、何に使っているのだろう」「自分が発表した飲食店は、ストローを紙製にしていた。友達が調べていた食べられる器を製造している企業で食べられるストローは作っていないのか」と更に知りたいと考えた。そこで、詳しく取組について聞いてみたい思い、そして調べた取組を応援したい思いを届ける手紙を作成することとした。生徒たちは、それぞれが選んだ企業に手紙を送り、生徒たちの手で発送した。(資料13)

数日経つと、複数の企業よりメールや手紙で返事をいただくことができ、掲示していった。掲示を見ている生徒たちは、「「有名な会社だけど手紙を読んでももらえてうれしいし、わたしたちの行動が伝わるのだな」」「「消費者の行動や声を届けていくと企業も耳を傾ける思いがあると知ることができた」と返送された言葉に目をやりながら話す様子があった。自分たちの声が届く喜びを感じながら、「自分自身の買い物も一つ一つ社会に繋がるなど消費行動が社会に及ぼす影響を重ね合わせて考えている様子がみられた。

(5)「消費」の世界を広げる場【手だて①ーイ】

そして、生徒Aが手紙を送付したKANKO学生服より出前授業の提案を受け、商品を実際に見ながら話を聞く場を設けた。



資料10 生徒Aのまとめたカード



資料11 付箋紙を確認する生徒

環境に優しい製品(を作っている)だけでなく
→(環境に優しい製品)であることを消費者に分かって貰うための教室を開いていてよい。

資料12

生徒Aのカードに貼られた付箋紙

生徒Aが手紙を送付したKANKO学生服より出前授業の提案を受け、商品を実際に見ながら話を聞く場を設けた。

まずは、地元の織物を用いている取組「尾州織物」を生かした尾張地区で採用されている制服の紹介を受けた。(資料14)

そして、「KANKOの制服はかなり前からPETボトルからできている再生ポリエステルでできている」と紹介を聞いた。生徒Aは、聞きながら、自分の着ている制服を触る仕草をしながら、「ごわごわしないのは不思議だな」と仲間と言葉を交わした。

また、生徒Aは、「丈夫に3年間、そのあともお下がりなどで長く使えるように制服メーカーは作っている」と話を聞き、制服に使われている繊維をスチールたわしで擦る体験をした。(資料15) 生徒Aは、擦ったあと、驚いた様子を見せ、制服の生地を改めて触れていた。その後、「これだけ丈夫なのだから、南中もバザーなどで制服の再利用できる機会があればよいのに。」という仲間の声に頷いていた。

最後にKANKOさんより「制服は長く使えるように丈夫に作っている。普段の服も同じように丈夫に使える服を大切に使ってほしい」という話とともに、発展途上国へ運ばれる衣服の資料を見た。出前授業の後、映像資料を補足で見せた。先進国などの消費が安さを求めるあまりに品質の悪い衣服が多く売られている状況、そして品質の悪いものをリサイクルという名目で途上国に運ばれ、途上国で使用できる状態のものは少なく、海岸に捨てられた衣服

わたしは、愛知県刈谷市立刈谷南中学校の石川遙希と申します。中学2年生の家庭科の学習でサステナブルを目指した「エシカル消費」について学習しました。その時調べ学習でKANKOが再生可能なエネルギーの植物由来ポリエステルを使って石油を使わずに作ることをしている我知道了。この取り組みが広まると地球温暖化を防ぐことができ、持続可能な社会になっていくと考えています。また、取り組みを知り自分の制服がどうなっているのか気になりました。まだまだ、中学生の私たちは自分で判断していく場は少なく購入することKANKOの取り組みを応援することは、難しいです。なので応援したい思いを手紙で届けようと思いました。さうなる取り組みを続けてください。

資料13 生徒Aが書いた手紙



資料14 出前授業の様子
(尾州織物について)

制服は日々使うものだけれど長く使えるように丈夫に作られていることや制服メーカーは石油からポリエステルを作り出しているのではなく、PETボトルなど再生原料で作られている社会と商品とのつながりを学んだ。そこから、私服も長く使えるものか判断したり、再生繊維でできているのかを確認したりするようにしたい。

資料16 生徒Aの振り返り

の山が形成され、ポリエステルなどの科学繊維が海に流出する原因となっているという問題を、生徒Aは知った。

生徒Aは、制服は日々使うものだけれど、長く使えるように丈夫に作られていることや制服メーカーは石油からポリエステルを作り出しているのではなく、PETボトルなど再生原料で作られている社会と商品とのつながりを学んだ。そして、振り返りに、「私服も長く使えるものか判断したり、再生繊維でできているのかを確認したり」と書き、制服という身近な商品のよさを知り、自分の私服の選び方を見直し、判断していこうとする姿があ

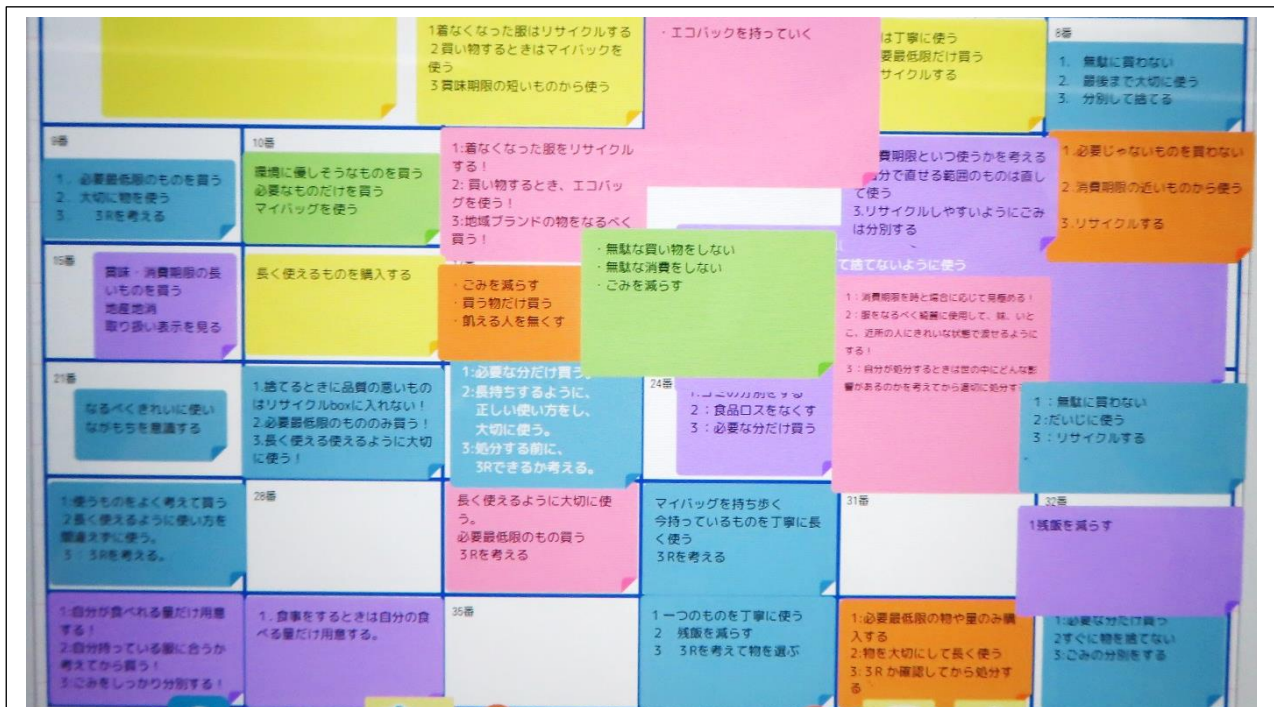


資料15 繊維を擦る生徒A

った。(資料16)

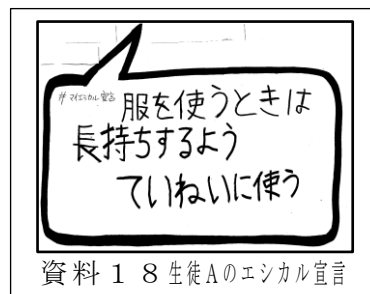
(6) よりよい「消費」をしたいと思いを巡らせる場【手だて①ーア・②ーイ】

出前授業の振り返りで、今後の生活を見直していた生徒の記述を紹介したのち、生徒たちに改めて仲間の応援したい企業・商品の発表やKAN KOさんの出前授業を受けて、今後の自分の生活について考える時間を設けた。そして、愛知県がSNSで行っている投稿キャンペーンの「#わたしのエシカルあいち」に合わせ、マイエシカル宣言を考えさせ、タブレット端末の学習アプリ「コラボノート」を用いて全員で意見を交流した。(資料17) 生徒Aは、①服を長持ちするように丁寧に使う②買いすぎない③リサイクルする と3つの宣言と記入した。全体に意見を見てどう思うか問うと、「みんなで食品を選ぶ活動をして、出前授業で衣類についても見直せたので、みんなが書いているように衣食住それぞれで工



資料17 コラボノートに集まったマイエシカル宣言の投稿

夫していくことがある」「自分は、買うときのことを考えていたけれど、購入するとき・使用するとき・使い終わったときなど、消費場面もそれぞれで考えていくことが大切だと分かった」という発言から、多角的に課題を捉えようとする生徒の様子が見られた。



資料18 生徒Aのエシカル宣言



資料19 宣言を伝え合う生徒Aたち

その後、カードの記入し自分の言葉で宣言を伝え合う時間を設けた。カードを持ちながら話すことで、宣言を伝え合ったあとも、「どうやって選ぶの」「長持ちするような使い方ってなにをするの」と実際の生活をイメージしながら互いに問いかけ合っていた。(資料18・19)

5 研究の成果

(1) 仮説1について

第2時では、どうして豚肉ではなく大豆でできているのかを「宗教上食べられない人に向けての商品を作ったのではないか、たんぱく質を多くとれるような商品として売ることが狙いでは」と自分が知っている知識を関連させて述べる仲間の意見を聞き生徒A自身も、振り返りで「よく家族が買い物に行くショッピングセンター」「好きなスポーツメーカー」などと自分の生活を具体的に思い返し、自分の生活経験や知識と重ね合わせながら考えることができた。

また、取組を調べていく場では、生徒Aは自分の着ている制服のタグを確認して、「これが毎日着ているものだから調べたい」と自分の生活の中から課題を見つけ、その後、「私服も長く使えるものか判断したり、再生繊維でできているのかを確認したりしたい」と私服の選び方を見直し、判断していこうとする姿があった。そして、仲間の宣言を聞いたあとも「どうやって選ぶの」「長持ちするような使い方ってなにをするの」と実際の生活をイメージしながら互いに問いかけ合う様子から、学びを生活に繋げていこうとする意識の高まりはあった。しかし、「それをするとうどうなるのか」という社会に及ぼす影響に迫る仲間同士の問いかけは、あまり見られなかった。

第2時や出前授業においては、社会に及ぼす影響について考え、判断しようとする姿が見られた。しかし、生徒Aがその判断しようとする意欲を単元の終末やその後の課題（家庭での活用）に結び付けられなかった

(2) 仮説2について

企業に手紙を送り、その後、生徒Aは返事をいただいたことで、自分たちの声が届く喜びとともに、自分自身の買い物も一つ一つ社会につながるなど、自分の消費行動と社会に及ぼす影響を重ね合わせて考えている様子がみられた。

また、Teamsのチャット機能やコラボノートの活用により発言でなくても全体の意見を互いに確認でき、一人一人が意思表示できる時間ができた。特に、チャット機能では、今回のような導入で端的な記述をするときには有効であった。しかし、第6時の様子を考えると、実際に紙に書いたものを提示しながら互いにやりとりをする方法をとることで自然と問いかけが生まれ、より考えを深められた。クラスの様子によって、個人の意見をもつのに自信がない、考えが浮かばないなど支援が必要なときには、コラボノートでの意見交流段階も有効だが、文字入力が多いときには、まだまだ個人差が大きく、有効に使うための教師の力量が重要だと分かった。

6 今後の課題

第1時で生徒たちが「安さ」を求める意識の根本は、家庭の意識にある。そのため、消費に関わる社会的課題については、学校教育を含め社会全体で抱えていかなければならないことだと再認識した。しかし、今回の単元計画では、家庭での意識を継続していく工夫をすることはできなかったことが課題である。

また、手紙の送付から出前授業までの連携はできたが、出前授業を行う前に衣生活にまつわる社会が抱えている課題を生徒が学ぶ時間を設けられなかったことで、出前授業に臨むときの目的意識が定まらず、企業の取組が必要となっている社会背景などに迫ることができなかった。

当初の単元計画では、消費生活の領域の学習を越えて、衣生活や住生活の学習で社会に及ぼす影響について取り上げたり、技術分野と連携したりして繰り返し社会とのつながりを考える経験をすることにより、生徒が日常での消費場面で自然と判断する力を高めたいと考えていた。しかし、年間計画の未熟さでできなかったことが今後の課題である。